

琉球大学学術リポジトリ

主観と愛着の沖縄アイデンティティ： 「世界のウチナンチュ大会」調査に見る海外沖縄 県系人の意識

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄移民研究センター 公開日: 2018-11-13 キーワード (Ja): 「世界のウチナンチュ」, 海外沖縄県系人, 沖縄アイデンティティ, ” Worldwide Uchinanchu” キーワード (En): Oversea Okinawans, Okinawa identity 作成者: 野入, 直美, Noiri, Naomi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010071

主観と愛着の沖縄アイデンティティ ——「世界のウチナーンチュ大会」調査に見る海外沖縄県系人の意識——

野入直美

- I. 本稿の課題と方法
- II. 「ウチナーンチュ像」に見る沖縄アイデンティティ
- III. <島嶼コミュニティ型>と<大陸ネットワーク型>
- IV. 結論——「世界のウチナーンチュ」の日常化に向けて

キーワード：「世界のウチナーンチュ」、海外沖縄県系人、沖縄アイデンティティ

I. 本稿の課題と方法

1. 世界のウチナーンチュ大会と参加者調査

本稿では、1990年からおよそ5年に一度、開催されてきた世界のウチナーンチュ大会（以下、大会と表記）のうち、第4回（2006年）・第5回（2011年）・第6回（2016年）大会における参加者アンケート調査（以下、大会調査と表記）によって得られたデータを用いて、海外に在住する沖縄系の人びとのアイデンティティを分析する。

大会は、沖縄県が主催し、約43万人に及ぶ海外在住の沖縄県系人（沖縄系の海外移民とその子孫たちなど）が主要な参加者となり、母県である沖縄に集って交流するイベントである。参加者数は回を重ねるごとに増加し、第6回大会では、海外と国内（沖縄県外にある沖縄県人会などからの参加者）を併せて7,956人の参加者があった（第6回世界のウチナーンチュ大会実行委員会調べ）¹⁾。ここには、会場を訪れた県民はカウントされていない。

大会参加者を対象とする大会調査は、第4回から第6回までの3回を、10年にわたって実施してきたものである²⁾。筆者は、第5回調査を実質的に統括し、第4回と第6回調査には研究分担者として参加した。継続的な統計調査によって、沖縄系の移民世代が暫時的にシフトしてきたことが明らかになった。さらに移民世代が推移しても、自分を「ウチナーンチュ」だと思っている人の比率は高い水準を保持しており、沖縄アイデンティティが保持されていることが見いだせた³⁾。

大会調査は、海外沖縄県系人の意識調査としては、規模と継続性において最大のものである。また、複数の国々に居住するエスニックグループの統計調査としても、ユニークなものとなっている。一方で、調査メンバーの入れ替わりと問題意識の変化によって、毎回、質問項目が更新されたため、10年間というスパンで大会参加者の意識変容を詳細に分析することは困難である。また、そもそも大会には、海外からの渡航費を賄える経済力と、沖縄系の活動への関心がある人びとが集っているという、参加者のバイアスも存在する。この調査データは、必ずしも海外の沖縄系の人びとの意識の総体を示しているわけではないことには留意が必要であろう。

本稿は、これらの限定を踏まえつつ、これまでの大会調査で得られたふたつの仮説の検証を試みる。

2. 仮説①—「構築する沖縄アイデンティティ」

第一の仮説は、沖縄アイデンティティの構築性についてである。

第5・6回大会調査では、「あなたが考える『ウチナーンチュ』とはどのような人ですか」という問いを設け、「沖縄で生まれた人」「祖先が沖縄本島あるいは離島出身である人」「自分は『ウチナーンチュだ』と思っている人」などの選択肢から、複数回答可で回答者に選択をうながした⁴⁾。

第5回大会調査(2011年)では、沖縄県内からの参加者と海外からの参加者に、「ウチナーンチュ像」において大きな違いが見いだされた。どちらも沖縄への愛着が上位に来るのは共通していたが、県内参加者は「沖縄での出生」項目が最も上位で、「祖先のルーツ」は下位に位置づいた。一方で、海外からの参加者は「祖先のルーツ」を重視し、逆に「沖縄での出生」は下位となった。移民世代別の分析では、1世は「沖縄での出生」を選ぶ人が選ばない人よりも多く、2世で選択と非選択の比率が拮抗し、3世ではこの項目を選ばない人が過半数となった。逆に、世代が推移するのに伴って選ばれる比率が上がる項目は、「祖先のルーツ」であった⁵⁾。

このことから、「ウチナーンチュ像」の構成要素は、回答者自身にあてはまるものが選ばれやすく、逆に当てはまらないものは選ばれにくいという傾向が見いだせた。ここから導かれた仮説は、沖縄アイデンティティの動的な構築性であった。もともと沖縄島に固有に存在するアイデンティティが移民によって海外に伝わり継承されてきたというよりも、国境を越えた移動や世代の推移そのものが、「ウチナーンチュとは何か」ということを新たに意味づけ、構成してきているというものである。本稿において検証する第一の仮説は、この沖縄アイデンティティの構築性である。

3. 仮説②—〈島嶼コミュニティ型〉と〈大陸ネットワーク型〉

第二の仮説は、海外沖縄県系人の居住地域の特徴を抽出した仮説的類型で、ハワイの〈島嶼コミュニティ型〉とブラジルの〈大陸ネットワーク型〉というものである。

第4回大会調査(2006年)では、有効回答765のうちハワイが277(全体の約36%)を占めたため、居住地別分析としてハワイとブラジル(73)を抽出し、比較を試みた。その結果、ハワイからの参加者は相対的に日本語力が低く、沖縄系移民、とくに戦前移民にルーツを持つ3世が多いという同質性が際立っていた。県人会の継承では「うまくいっている」という回答の比率が相対的に高く、海外のウチナーンチュとの交流意欲は相対的にやや低い、という結果が出た。一方でブラジルは、相対的に日本語力は高く、参加者に占める沖縄系は多いが、戦前移民と戦後移民を含んでいるという点で多様性が見出せた。県人会の継承ではハワイよりも困難さがあり、海外のウチナーンチュとの交流意欲は相対的に高かった⁶⁾。

このことから、ハワイにおいては、島嶼という地理的な条件と沖縄県系人の集住という社会的要件を背景として、沖縄系の人びとは、ハワイの中だけでも相当に沖縄ネットワークの恩恵を享受しており、特に海外同胞と交流しなくてもある程度は自足しているという〈島嶼コミュニティ型〉という仮説類型を導き出した。ブラジルについては、広大な大陸に散住しているために県系人の動員や活動が困難なのだが、そのことが海外との交流に期

待する積極性にもつながっているという、＜大陸ネットワーク型＞という仮説類型を導き出した。展望としては、従来は凝集性に優れたハワイが「世界のウチナーンチュ」のネットワーク化を牽引してきたが、島嶼・集住という要件を満たしている地域はまれであることから、今後はむしろ＜大陸ネットワーク型＞が汎用性を増していくのではないかという仮説である⁷⁾。本稿では、第6回調査データを用いてハワイとブラジル、そしてハワイを除くアメリカ合衆国を比較し、この仮説を検証する。

4. 大会参加者数と調査対象者数

第6回大会では、海外参加者数がかつてない伸びを示した（図1）。内訳としては、アメリカ（32.8%）とハワイ（25.3%）が海外参加者に占める比率がきわめて大きい。アメリカ合衆国からの参加者が、海外参加者の過半数を上回っている。なお、本稿では「アメリカ」を、ハワイとの比較のため、ハワイを除くアメリカ合衆国として集計している。

表1は、主要な居住地域ごとの参加者数と、大会調査における有効回答数の推移である。大会調査では、第5回大会以降、県内居住者を調査対象者に含めるようにした。それは同大会から、主要会場が宜野湾市から那覇市に移動し、開会式・閉会式に県民も参加できるようになり、県民の大会参加が大幅に増加したためである。第6回大会調査では、海外参加者の有効回答者数が県民のそれを下回り、地域別分析を許容するぎりぎりの規模となった。

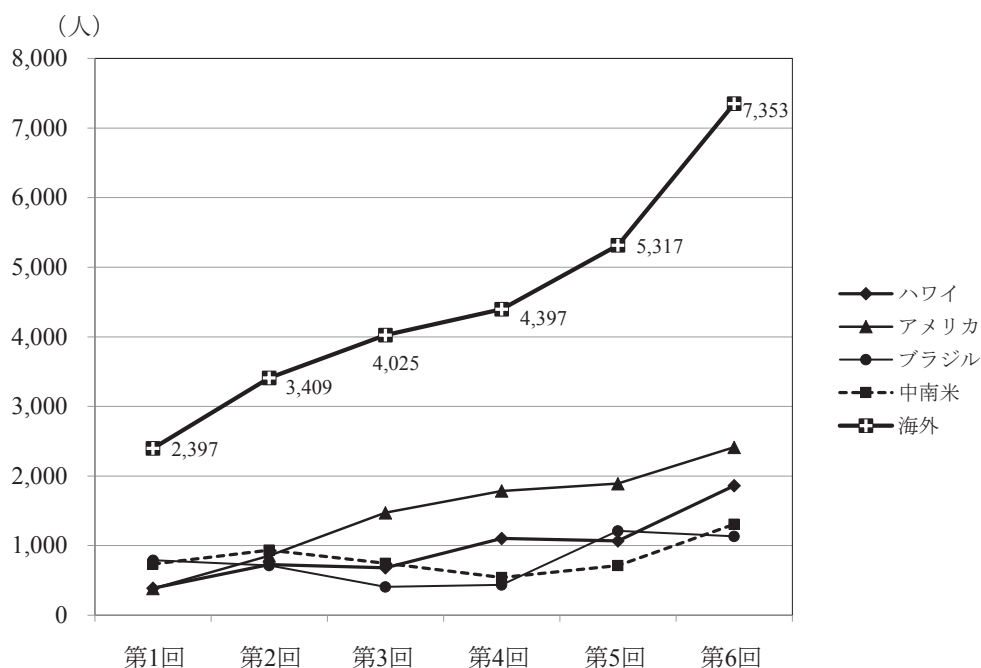


図1 第1～6回大会 居住地域別参加者数の推移（大会実行委員会調べ）⁸⁾

注) アメリカ：ハワイ州を除くアメリカ合衆国。中南米：ブラジルを除く。

表1 居住地域別大会参加者数（第1～6回）と有効回答数・対参加者比率（第4～6回）

地域/大会回数	参加者数(人)						有効回答数と参加者に占める比率(人・%)					
	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第4回		第5回		第6回	
ハワイ	386	727	681	1,101	1,065	1,861	274	24.9	151	14.2	62	3.3
アメリカ	382	853	1,472	1,785	1,891	2,413	214	12.0	239	12.6	143	5.9
ブラジル	788	715	405	436	1,213	1,132	73	19.0	104	8.6	41	3.6
中南米	735	979	744	539	713	1,309	77	14.3	78	10.9	69	5.3
海外参加者	2,397	3,409	4,025	4,397	5,317	7,353	777	17.7	651	12.2	356	4.8
県内参加者	—	—	—	—	—	—	0	—	252	—	677	—

II. 「ウチナーンチュ像」に見る沖縄アイデンティティ

1. アイデンティティの生得性と獲得性

本稿では、「ウチナーンチュとはどのような人か」というウチナーンチュ像を通じて、大会参加者の沖縄アイデンティティを分析する。回答者によって選ばれやすい項目とそうでない項目を明らかにし、その特徴を抽出することで、県内参加者と海外からの参加者の意識の相違や共通点を明らかにする。海外参加者の中では、ハワイ、ハワイ以外のアメリカ合衆国、ブラジルという主要な居住地域と、移民世代ごとの特徴を把握する。さらに、2011年と2016年の大会調査データを用いて、大会参加者の意識の変容について考察する。

2011・2016年の大会調査では、「あなたはご自身をウチナーンチュだと思いますか」という問いを設けた。これには圧倒的多数の人びとが肯定的に回答するため、回答者の属性による差異がほとんど生じず、居住地や移民世代などの属性による分析は難しい。そのため筆者は、ウチナーンチュ像を尋ねる問いを用いて沖縄アイデンティティ分析を行う。

沖縄アイデンティティをとらえるためにウチナーンチュ像を用いるのは、回答者によって重視される項目と、逆に選ばれにくい項目が、多様な形で展開されるからである。項目の順位づけと、項目ごとの選択/非選択の比率の分析を行うことで、回答者の属性による意識の差異や重なり、2011年と2016年の意識の変化をとらえることができる。

ウチナーンチュ像の問いには、エスニック・アイデンティティの構成要素を踏まえて選択肢を設けた。それは、「沖縄で生まれた人」「沖縄で幼少期を過ごした人」「親のどちらかが沖縄本島あるいは離島出身である人」「祖先が沖縄本島あるいは離島出身である人」「沖縄に住んでいる人」「方言を少しでも話せる人」「沖縄の文化・歴史のことを詳しく知っている人」「沖縄に貢献しようという気持ちを持っている人」「自分は『ウチナーンチュだ』と思っている人」「沖縄が好きの人」「沖縄に住んでいる人」というものである⁹⁾。

これらのうち、「沖縄出生」「幼少期の沖縄経験」「親の出自」「祖先のルーツ」という前半の4項目は、本人にとって生まれながらの所与の要件である。これらは、エスニック・アイデンティティを構成する<生得的要素>にあたる。そして、「方言」「文化・歴史の知しつ」「貢献意欲」「主観」「愛着」の5項目は、生得的要素に影響を受けつつも、本人が意識的に習得したり取捨選択したりすることが可能な要件である。こちらは、エスニック・アイデンティティの<獲得的要素>と見なすことができる。「現在の沖縄居住」は、自分の意思によって実行可能ではあるが、海外の沖縄県系人にとってハードルが高く、

所与の条件下では海外在住となることから、獲得的要素と生得的要素の両方にまたがる項目とする。

生得的要素と獲得的要素は、エスニシティの原初性と機動性に対応している¹⁰⁾。1970年代以降、アメリカの公民権運動をひとつの発端として、マイノリティ集団が権利と尊厳の回復を求めるエスニック・ムーブメントが世界的な現象となっていった。それに伴い、エスニシティ研究、とくに社会学の領域において、エスニシティを、もともとそのように生まれつく個人の特性や、集団が自然なものとして内包してきた他集団との差異といった原初性よりも、個人や集団が意思と行動によって獲得していく機動性を重視してとらえようとする傾向が広まった。90年代以降は、カルチュラルスタディーズの影響のもとで、複数帰属性や故郷喪失性などを含意するディアスポラ概念や文化の混淆に対する関心が高まり、エスニシティの固有性や本質性を、言説と見なして相対化していこうとする構築主義が興隆した。

筆者が第5回調査結果から導いた仮説は、沖縄アイデンティティが、もともと沖縄系として持って生まれたものではなく、移動と世代の推移の中で意味づけられ、変容してきたものであるというものだった。この仮説は、構築主義的なエスニシティ研究の潮流に重なっている。

本稿では5年後の2016年大会調査データを用いて、この仮説の検証を試みる。

2. 海外参加者と県内参加者の比較

海外参加者の「ウチナーンチュ像」を2011・2016年データで比較すると、ランキングにはほとんど変化がない（図2）。最も上位に位置づくのは「自分を『ウチナーンチュ』だと思う」という主観と、「沖縄が好き」という愛着であり、逆に最も下位にあるのは沖縄での幼少期経験と現在の沖縄居住である。〈生得的要素〉においては、祖先のルーツが重視されている一方で、本人の沖縄での生い育ちなど、海外参加者にとって難易度の高い生得的要素は選ばれにくいという結果になっている。〈獲得的要素〉で最も重視されている項目は、主観と愛着である。沖縄の文化・歴史の知しつや方言の会話力など、難易度の高い項目は、ランキングの中位に位置する。

2011・2016年データで変化が見られたのは、それぞれの項目についての選択と非選択の比率であった（表2）。とくに上位の項目について、2016年データの方が、選択と非選択の差が大きい。主観と愛着の優位性が鮮明になってきている。

これに対し、県内参加者の「ウチナーンチュ像」は、順位に変化が見いだせた（図3）。2011年調査で最上位であった沖縄出生は、2016年調査では大幅に順位を落とし、主観が最上位となった。現在の沖縄居住も順位を落としている。県内参加者の沖縄アイデンティティにおいては、〈生得的要素〉の後退と〈獲得的要素〉の優位化が、重要な変化として見いだせた。主観と愛着が最重視されるようになった結果、県内参加者と海外参加者のどちらも、上位2項目に主観と愛着が位置づくようになったのである。このことは、両者の間にそれぞれの特徴が見いだせた前回大会調査との大きな相違である。現象的には、県内参加者の意識が、沖縄アイデンティティの生得性、とくに沖縄出生と現在の沖縄居住を最重視しない方向へ、すなわち海外参加者の方へと近づいてきている。

県内参加者の意識の変化において興味深いのは、祖先のルーツを重視する傾向の増加

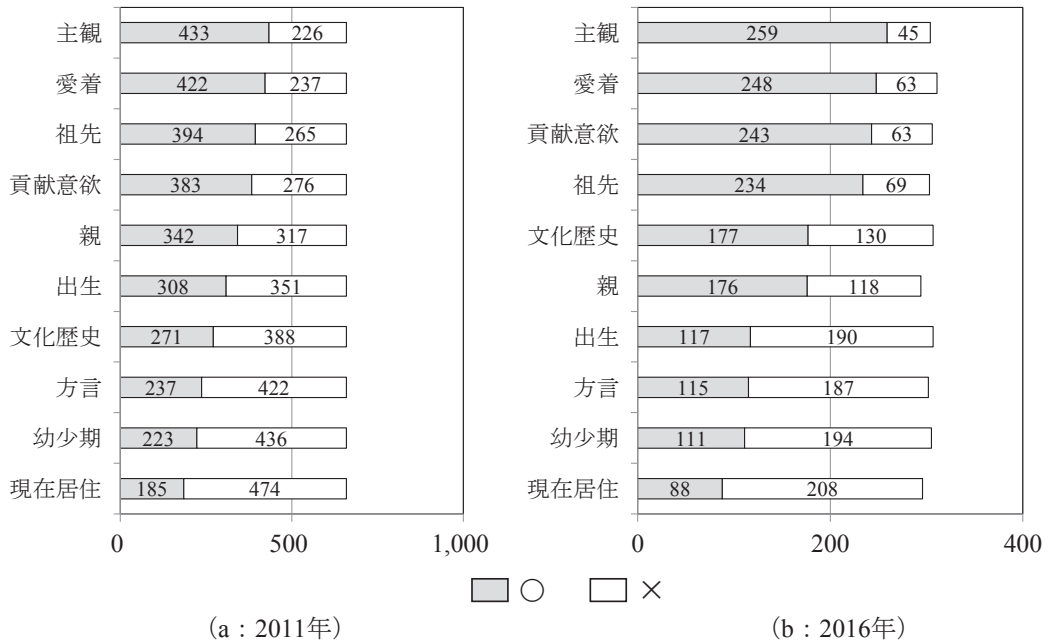


図2 海外参加者ウチナンチュ像順位 (2011・2016)

表2 海外参加者のウチナンチュ像と沖縄アイデンティティ (2011・2016年)

ウチナンチュ像	2011年				2016年				順位	○の比率	
	○	×	○%	×%	○	×	○%	×%			
生 得的要素	出生	308	351	47	53	117	190	38	62	↘	↘
	幼少期	223	436	34	66	111	194	36	64	→	→
	親	342	317	52	48	176	118	60	40	↘	↗
	祖先	394	265	60	40	234	69	77	23	↘	↗
	現在居住	185	474	28	72	88	208	30	70	→	→
獲得的要素	主観	433	226	66	34	259	45	85	15	→	↗
	愛着	422	237	64	36	248	63	80	20	→	↗
	貢献意欲	383	276	58	42	243	63	80	20	↗	↗
	文化歴史	271	388	41	59	177	130	58	42	↗	↗
	方言	237	422	36	64	115	187	38	62	→	→

である。2011年調査では、県内参加者の多くは「沖縄で生まれた人がウチナンチュだ」と考えており、自分自身が自明にそうであるので、わざわざ祖先のルーツを持ち出すまでもないという意識がうかがえた。しかし2016年調査では、祖先のルーツが親の出生よりも上位に位置づき、祖先のルーツという項目において、選択が非選択を上回った。

祖先のルーツは、海外で生まれ育った沖縄系の人びとにとって、沖縄アイデンティティの根拠としての象徴的な意味をもっている。沖縄での生育経験のない海外沖縄系人たちは、祖先のルーツというシンボリックなアイデンティティを必要としていると言える

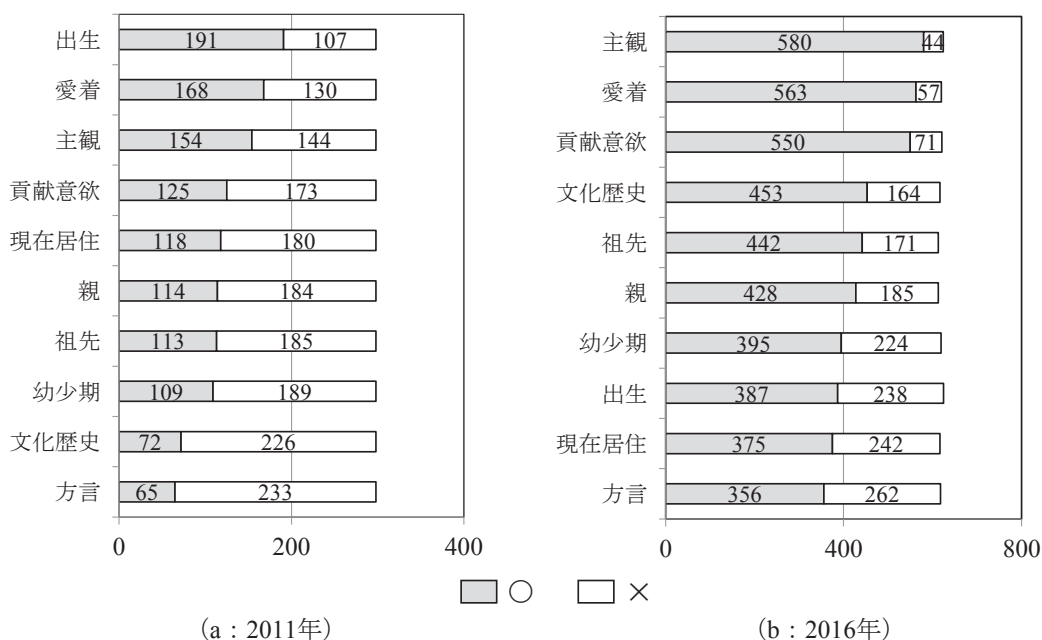


図3 県内参加者ウチナーンチュ像順位 (2011・2016)

表3 県内参加者のウチナーンチュ像と沖縄アイデンティティ (2011・2016年)

ウチナーンチュ像	2011年				2016年				順位	○の比率	
	○	×	○%	×%	○	×	○%	×%			
生 出生	191	107	64	36	387	238	62	38	↘	→	
得 幼少期	109	189	37	63	395	224	64	36	↗	↗	
的 親	114	184	38	62	428	185	70	30	→	↗	
要 祖先	113	185	38	62	442	171	72	28	↗	↗	
素 現在居住	118	180	40	60	375	242	61	39	↘	↗	
獲 主観	154	144	52	48	580	44	93	7	↗	↗	
	得 愛着	168	130	56	44	563	57	91	8	→	↗
	的 貢献意欲	125	173	42	58	550	71	89	11	↗	↗
	要 文化歴史	72	226	24	76	453	164	73	27	↗	↗
	素 方言	65	233	22	78	356	262	58	42	→	↗

う。そのような必要性をもたないはずの沖縄県民が、祖先のルーツを重視するようになってきていることは興味深い。

海外参加者と県内参加者との相違は、それぞれの項目における選択と非選択の比率である(表2・3)。沖縄出生はどちらも順位を下げたが、海外における選択率は38%に過ぎないのに対し、県内では62%と、比率には大きな開きがある。現在の沖縄居住も、海外では30%、県内は61%である。ここからは、「沖縄で生まれたかどうかや、今、沖縄に住んでいるかどうかは、ウチナーンチュであることの決め手ではない」とする、海外参加者

ならではの沖縄アイデンティティが読み取れる。＜獲得的要素＞、とくに主観と愛着の優位性においては、県内が海外に近づく形で県内・海外参加者間の均質化が進んだ一方で、＜生得的要素＞に対する批判的な意識には、まだ相違が見いだせる。

海外参加者が、自分自身に該当しない事項を選ばないという傾向は、2回の調査結果に共通して確認された。一方で、県内参加者は、自分自身が該当する＜生得的要素＞、沖縄出生や現在の沖縄居住を最重視しなくなっている。アイデンティティの変容と構築性を考察する上で示唆的である。

3. ハワイ、アメリカ、ブラジルの比較

(1) ハワイにおける沖縄アイデンティティ

ハワイからの参加者の「ウチナーンチュ像」は、＜生得的要素＞では、祖先のルーツと沖縄出生が順位を落としている（図4）。ただし、祖先のルーツについては重要性が減じたのではなく、選択率は高いままであるが（表4）、数において主観と愛着が祖先を上回ったことで、＜獲得的要素＞優位のアイデンティティが顕在化した。この傾向は、海外参加者全体の傾向と一致する。

現在の沖縄居住は、順位は上げているが、選択・非選択の比率では、選ばれない比率が増している。

ハワイにおける＜獲得的要素＞では、方言が順位を下げている、非選択の比率が高い。このことは、ハワイにおけるウチナーグチと日本語力の相対的な低さ（図5）と関連していると考えられる。

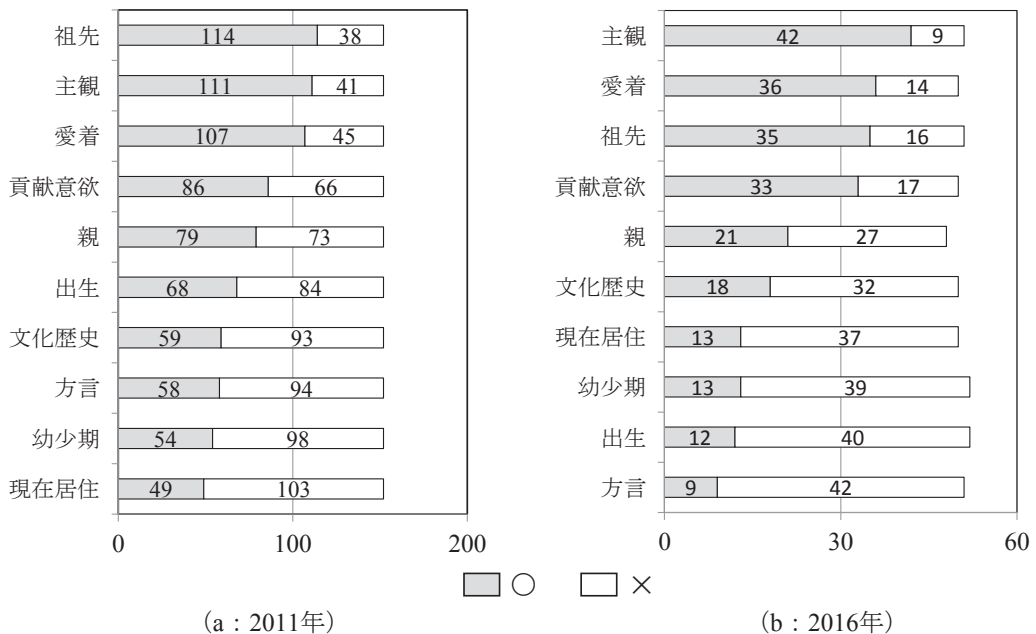
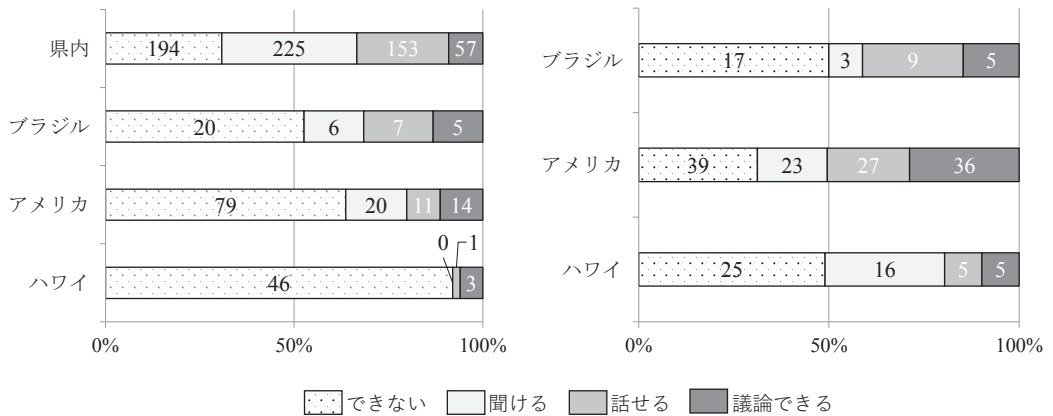


図4 ハワイ参加者ウチナーンチュ像順位 (2011・2016)

表4 ハワイ参加者のウチナーンチュ像と沖縄アイデンティティ（2011・2016年）

ウチナーンチュ像	2011年				2016年				順位	○の比率	
	○	×	○%	×%	○	×	○%	×%			
生 得的要素	出生	68	84	45	55	12	40	23	77	↓	↓
	幼少期	54	98	36	64	13	39	21	79	↑	↓
	親	79	73	52	48	21	27	44	56	→	↓
	祖先	114	38	75	25	35	16	69	31	↓	↓
現在居住	49	103	32	68	13	37	26	74	↑	↓	
獲得的要素	主観	111	41	73	27	42	9	82	18	↑	↑
	愛着	107	45	70	30	36	14	72	28	↑	→
	貢献意欲	86	66	57	43	33	17	66	34	→	↑
	文化歴史	59	93	39	61	18	32	36	64	↑	→
	方言	58	94	38	62	9	42	18	82	↓	↓



(a : ウチナーグチ能力)

(b : 日本語能力)

図5 居住地別言語能力（2016）

ハワイにも熱心に沖縄の言葉を学ぶ人びとは存在するが、ブラジルのような戦後移民がおらず、北米のような規模で沖縄や日本からの人の流入が続いているわけでもない。そのため、移民1世の高齢化と死去に伴って、全体的な日本語とウチナーグチの力の低下が著しい。そしてハワイでは、移民1世から2世へと県人会の担い手が変わる時期に、すすんで沖縄系の会合や会報で用いる言語を日本語から英語に切り替え、それによって世代継承をスムーズに行ってきた経緯がある。言語項目の非選択の比率が高い背景には、言語をローカル化したからこそ、ハワイ育ちの若者たちに沖縄系の活動を継承することができたのだという、ハワイの自負があるかもしれない。

(2) アメリカにおける沖縄アイデンティティ

ハワイ以外のアメリカ合衆国からの参加者においては、祖先のルーツが順位を上げ、愛着が順位を下げた(図6, 表5)。<生得的要素>では、沖縄居住と幼少期の沖縄経験が下位に位置づいていることは変化がないが、祖先のルーツというシンボリック・アイデンティティが最重視されるようになったことが変化として見いだせる。方言は、順位は低いですが、ハワイに比べると選択の比率が高い。

<獲得的要素>については、貢献意欲が愛着を上回り、能動性や機能性を重視した構成となった。このことは、アメリカからの参加者に、現代的な人の移動を経験し、本人の意思と選択によって国境を越えてきた人びとが多いことと関連しているように思われる。

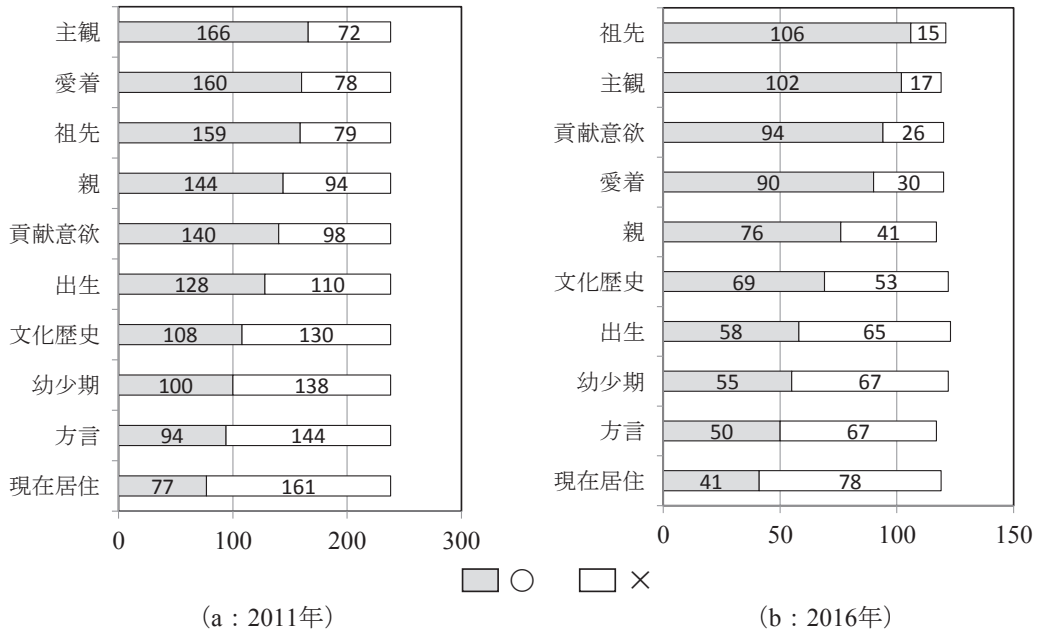


図6 アメリカ参加者ウチナンチュ像順位 (2011・2016)

表5 アメリカ参加者のウチナンチュ像と沖縄アイデンティティ (2011・2016年)

ウチナンチュ像	2011年				2016年				順位	○の比率
	○	×	○%	×%	○	×	○%	×%		
生得的要素										
出生	128	110	54	46	58	65	47	53	↘	↘
幼少期	100	138	42	58	55	67	45	55	→	→
親	144	94	61	39	76	41	65	35	↘	→
祖先	159	79	67	33	106	15	88	12	↗	↗
現在居住	77	161	32	68	41	78	34	66	→	→
獲得的要素										
主観	166	72	70	30	102	17	86	14	↘	↗
愛着	160	78	67	33	90	30	75	25	↘	↗
貢献意欲	140	98	59	41	94	26	78	22	↗	↗
文化歴史	108	130	45	55	69	53	57	43	↗	↗
方言	94	144	39	61	50	67	43	57	→	→

(3) ブラジルにおける沖縄アイデンティティの特徴

ブラジルからの参加者については、主観・愛着・貢献意欲が上位を占める<獲得的要素>の優位性が、第5・6回大会調査において共通して見いだせた(図7, 表6)。現在の沖縄居住、幼少期の沖縄体験、沖縄出生という<生得的要素>は、共通して下位であった。

一方で、<生得的要素>の中では、祖先のルーツが順位を上げた。<獲得的要素>では、沖縄の文化・歴史の知しつが順位を上げた。方言は、順位は下げたが、選択と非選択の比率は拮抗している。

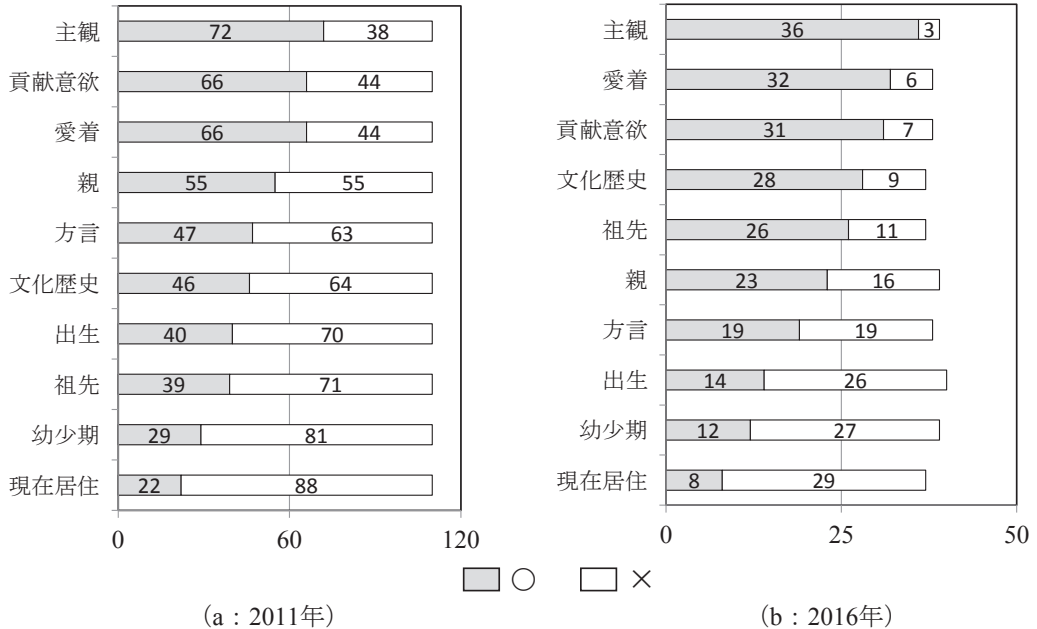


図7 ブラジル参加者ウチナーンチュ像順位 (2011・2016)

表6 ブラジル参加者のウチナーンチュ像と沖縄アイデンティティ (2011・2016年)

ウチナーンチュ像	2011年				2016年				順位	○の比率
	○	×	○%	×%	○	×	○%	×%		
生得的要素										
出生	40	70	36	64	14	26	35	65	↘	→
幼少期	29	81	26	74	12	27	31	69	→	→
親	55	55	50	50	23	16	59	41	↘	↗
祖先	39	71	35	65	26	11	70	30	↗	↗
現在居住	22	88	20	80	8	29	22	78	→	→
獲得的要素										
主観	72	38	65	35	36	3	92	8	→	→
愛着	66	44	60	40	32	6	84	16	↗	↗
貢献意欲	66	44	60	40	31	7	82	18	↘	↗
文化歴史	46	64	42	58	28	9	76	24	↗	↗
方言	47	63	43	57	19	19	50	50	↘	↗

4. 移民世代間の比較

(1) 1世の沖縄アイデンティティ

移民世代別に集計すると、沖縄移民1世の「ウチナーンチュ像」は、沖縄への貢献意欲と祖先のルーツが上昇し、親の出自と本人の出生が下降した（図8、表7）。その結果、愛着・主観・貢献意欲が上位3位を占める<獲得的要素>優位の構成となった。これらの上位項目は、非選択の比率が極めて低い。一方で、中位以下の項目では、選択と非選択の比率がほぼ拮抗している。祖先のルーツを重視するようになったこと、選択と非選択の比率がさほど変わらない項目が多いことについては、移民1世の回答は、沖縄県民の回答と傾向が似ている。

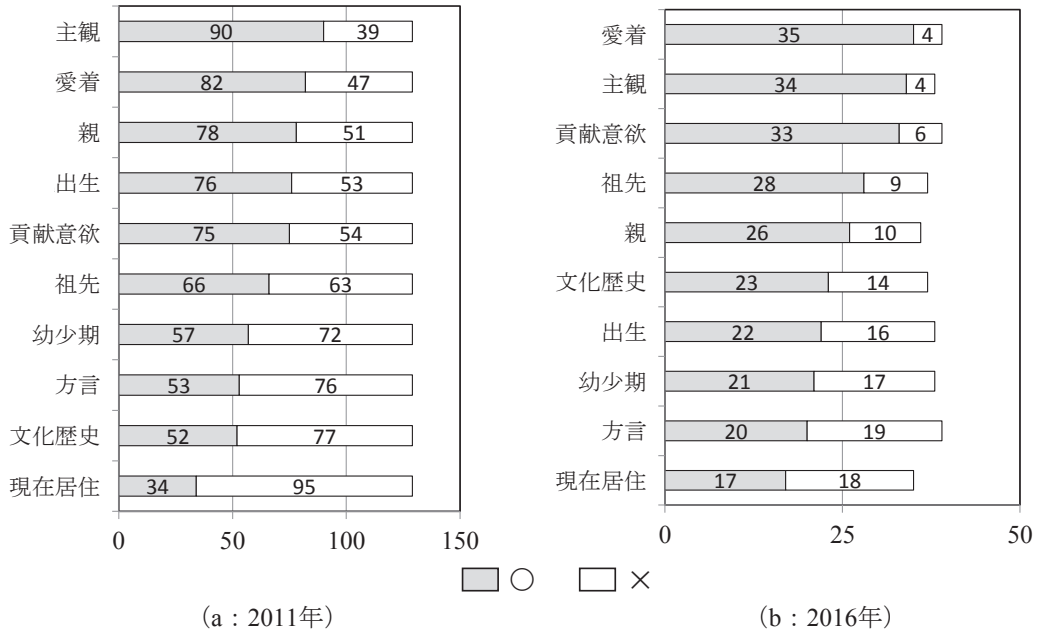


図8 1世参加者ウチナーンチュ像順位 (2011・2016)

表7 1世参加者のウチナーンチュ像と沖縄アイデンティティ (2011・2016年)

ウチナーンチュ像	2011年				2016年				順位	○の比率
	○	×	○%	×%	○	×	○%	×%		
生 出生	76	53	59	41	22	16	58	42	↘	→
得 幼少期	57	72	44	56	21	17	55	45	↘	↗
的 親	78	51	61	39	26	10	72	28	↘	↗
要素 祖先	66	63	51	49	28	9	76	24	↗	↗
現在居住	34	95	26	74	17	18	49	51	→	↗
主観	90	39	70	30	34	4	89	11	↘	↗
愛着	82	47	64	36	35	4	90	10	↗	↗
貢献意欲	75	54	58	42	33	6	85	15	↗	↗
文化歴史	52	77	40	60	23	14	62	38	↗	↗
方言	53	76	41	59	20	19	51	49	↘	↗

(2) 2世の沖縄アイデンティティ

移民2世においても、祖先のルーツが上昇した（図9）。第6回大会調査では、＜獲得的要素＞は主観，貢献意欲，愛着の順となっている。方言は順位を落とし，選択と非選択の比率が逆転した（表8）。＜生得的要素＞では，親の出生が順位を落とし，祖先のルーツが親の出自，本人出生よりも上位に来ている。＜生得的要素＞の中では，祖先のルーツというシンボリック・アイデンティティだけが優位性を増している。

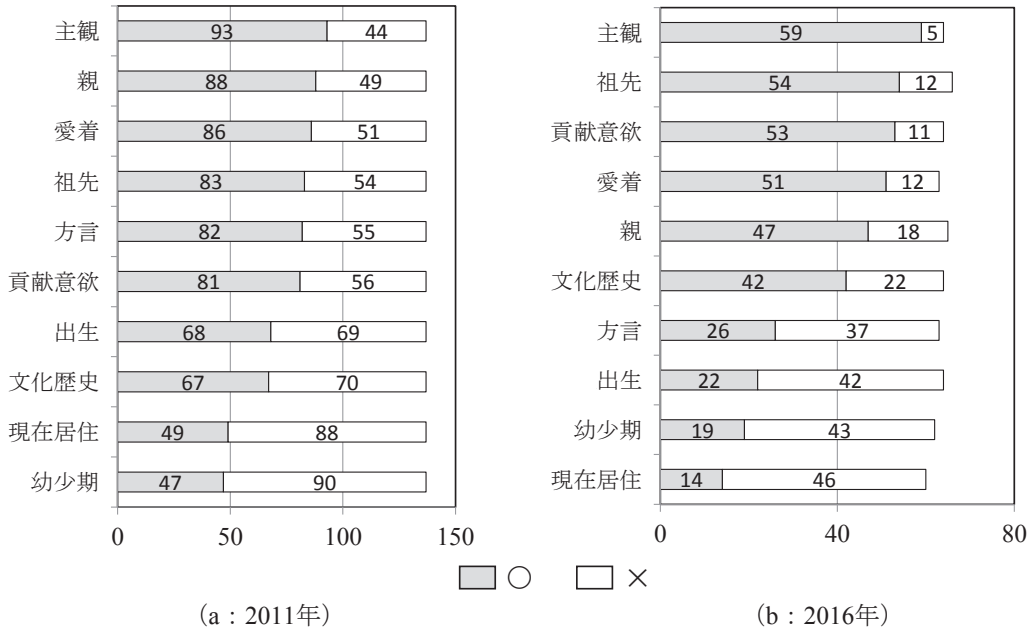


図9 2世参加者ウチナーンチュ像順位（2011・2016）

表8 2世参加者のウチナーンチュ像と沖縄アイデンティティ（2011・2016年）

ウチナーンチュ像	2011年				2016年				順位	○の比率
	○	×	○%	×%	○	×	○%	×%		
生得的要素										
出生	68	69	50	50	22	42	34	66	↘	↘
幼少期	47	90	34	66	19	43	31	69	↗	→
親	88	49	64	36	47	18	72	28	↘	↗
祖先	83	54	61	39	54	12	82	18	↗	↗
現在居住	49	88	36	64	14	46	23	77	↘	↘
獲得的要素										
主観	93	44	68	32	59	5	92	8	→	↗
愛着	86	51	63	37	51	12	81	19	↘	↗
貢献意欲	81	56	59	41	53	11	83	17	↗	↗
文化歴史	67	70	49	51	42	22	66	34	↗	↗
方言	82	55	60	40	26	37	42	58	↘	↘

(3) 3世の沖縄アイデンティティ

沖縄移民3世については、主観、愛着、貢献意欲、祖先のルーツの上位4項目が僅差で並び、主観を重視した<獲得的要素>の優位性が見いだせた(図10)。祖先のルーツは順位的には下降したが、それでも選択と非選択の比率は7:3である(表9)。祖先のルーツの重要性が下がったというよりは、それ以上に主観・愛着・貢献意欲の優位性が圧倒的になったと言える。

<生得的要素>においては、沖縄出生が最下位に下降した。幼少期の沖縄経験と現在の沖縄居住という項目が選ばれにくいことは、二回の調査において共通している。

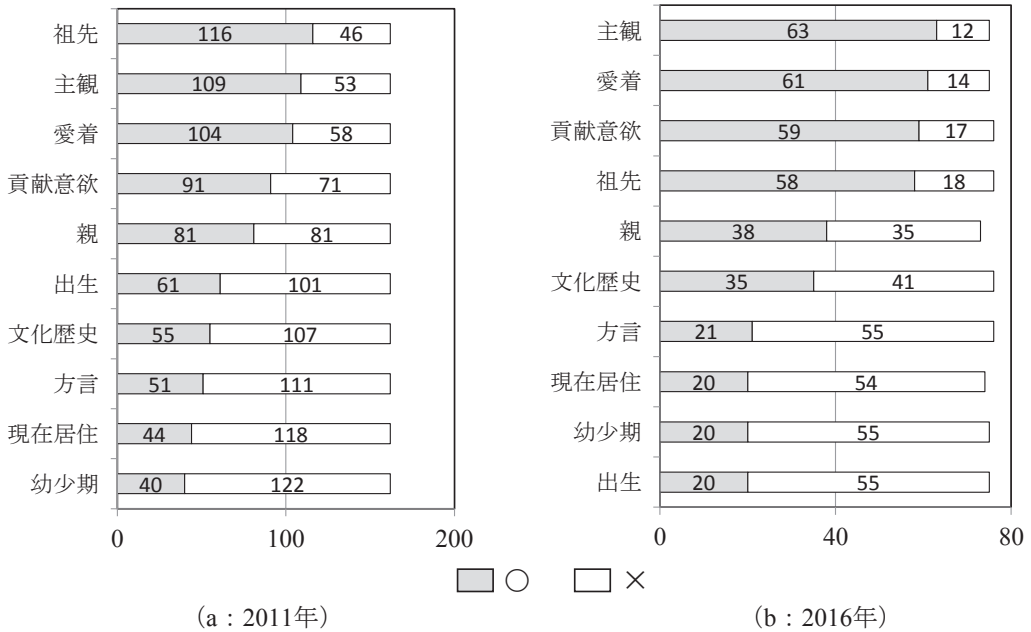


図10 3世参加者ウチナンチュ像順位 (2011・2016)

表9 3世参加者のウチナンチュ像と沖縄アイデンティティ (2011・2016年)

ウチナンチュ像	2011年				2016年				順位	○の比率
	○	×	○%	×%	○	×	○%	×%		
生得的要素										
出生	61	101	38	62	20	55	27	73	↘	↘
幼少期	40	122	25	75	20	55	27	73	↗	→
親	81	81	50	50	38	35	52	48	→	→
祖先	116	46	72	28	58	18	76	24	↘	→
現在居住	44	118	27	73	20	54	27	73	↗	→
獲得的要素										
主観	109	53	67	33	63	12	84	16	↗	↗
愛着	104	58	64	36	61	14	81	17	↗	↗
貢献意欲	91	71	56	44	59	17	78	22	↗	↗
文化歴史	55	107	34	66	35	41	46	54	↗	↗
方言	51	111	31	69	21	53	28	72	↗	→

(4) 4世・5世の沖縄アイデンティティ

4世と5世についてはケース数が限られるため、詳細な検討を行うことは難しい。主観性が優位で、祖先のルーツも重視されていることは指摘できる（図11、表10）。

Ⅲ. <島嶼コミュニティ型>と<大陸ネットワーク型>

ここでは、沖縄系の人びとどうしの交流に着眼して、沖縄アイデンティティの地域的特徴について検討する。

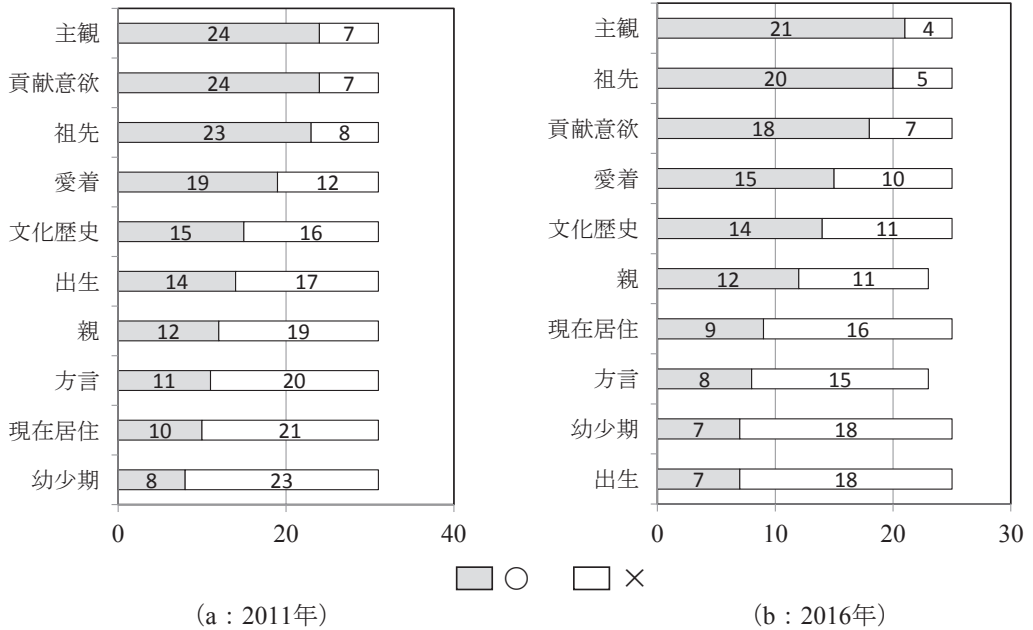


図11 4・5世参加者ウチナーンチュ像順位（2011・2016）

表10 4・5世参加者のウチナーンチュ像と沖縄アイデンティティ（2011・2016年）

ウチナーンチュ像	2011年				2016年				順位	○の比率	
	○	×	○%	×%	○	×	○%	×%			
生 出生	14	17	45	55	7	18	28	72	↘	↘	
得 幼少期	8	23	26	74	7	18	28	72	↗	→	
的 親	12	19	39	61	12	11	52	48	↗	↗	
要 祖先	23	8	74	26	20	5	80	20	↗	→	
素 現在居住	10	21	32	68	9	16	36	64	↗	→	
獲得的要素	主観	24	7	77	23	21	4	84	16	→	↗
	愛着	19	12	61	39	15	10	60	40	→	→
	貢献意欲	24	7	77	23	18	7	72	28	↘	→
	文化歴史	15	16	48	52	14	11	56	44	→	↗
	方言	11	20	35	65	8	15	35	65	→	→

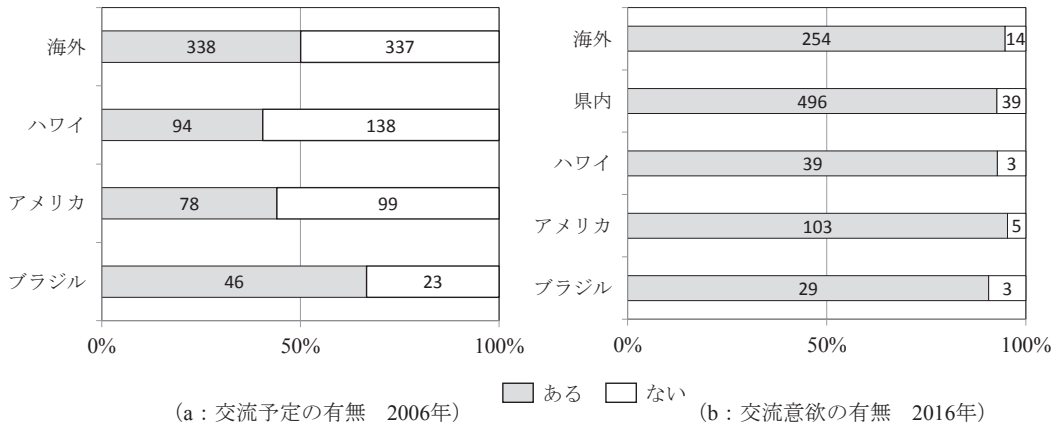


図12 居住地別 海外のウチナーンチュとの交流予定(2006)と交流意欲(2016)

2006年調査(第4回大会)では、「海外のウチナーンチュとの今後の交流予定」の有無を尋ねた。その回答は、海外参加者全体では「ある」と「ない」がほぼ拮抗したのに対し、ハワイにおける相対的な消極性と、ブラジルにおける相対的な積極性が浮かび上がった¹¹⁾(図12-a)。

このことから、筆者はハワイについて、<島嶼コミュニティ型>という仮説的な類型を索出した。それは、島嶼という地理的特性と沖縄系の人びとの集住という社会的要件を背景として、大会に参加する前からハワイの中には沖縄系の緊密なコミュニティがあり、そのために沖縄系の人びとは、良くも悪くも、ハワイ内部で自足しているのではないかという仮説である¹²⁾。彼らは、海外の沖縄県系人との交流をさほど必要とせず、視線はどちらかというところ「世界のウチナーンチュ」よりも沖縄島に向いているのではないかというものであった。

一方でブラジルについては、<大陸ネットワーク型>という仮説的な類型を索出した。広域の大陸という地理的特色と沖縄系の人びとの散住という社会的要件を背景として、ハワイに比べて県系人の動員や活動には困難があるのだが、だからこそ海外の県系人との交流への期待が高いのではないかという仮説である¹³⁾。

2016年調査で海外のウチナーンチュとの「交流意欲」を尋ねたところ、いずれの居住地域においても高い交流意欲が見いだされ、地域差はほとんどなかった(図12-b)。

さらに2016年調査では、参加者が大会にやってくる以前から、どこの沖縄系の人びとと、どれだけの交流をもっていたか調べた。表11は、その交流実績とも言うべきネットワークの方向と量を、参加者の主要な居住地ごとにまとめたものである。「住んでいる地域」は、州・県の範囲である。「住んでいる国」は、自国内で自分が居住している州以外の、他州を意味する。標準偏差で海外参加者全体を見ると、住んでいる地域と住んでいる国における交流の量はほぼ拮抗し、そこから半減して沖縄県民との交流が、さらに半減して海外の沖縄県系人との交流が続くという構成になっている。

ハワイの特徴は、住んでいる地域と住んでいる国の交流の量の大きな隔たりで、前者が後者を大きく上回っている。アメリカ大陸とは遠隔の島嶼という地理的な条件があり、

表 11 居住地域別 交流実績（大会までに定期的に交流していた人数）（2016）単位：人

居住地域	交流先	0	1~10	11~30	31~50	50~	度数	最小	最大	平均	SD
海外	住んでいる地域	59	112	35	15	37	250	0	300	23.4	48.2
	住んでいる国	74	82	37	8	15	228	0	300	18.2	43.2
	沖縄県内の人	107	71	27	7	8	230	0	200	10.3	22.6
	他国の人	142	52	12	4	6	225	0	150	6.3	13.0
県内	海外の人	292	137	19	3	3	2	0	10	5.0	7.1
ハワイ	住んでいる地域	7	31	6	0	0	42	0	300	18.4	54.1
	住んでいる国	13	16	3	0	2	36	0	100	3.8	18.1
	沖縄県内の人	31	4	3	0	0	36	0	100	10.4	23.6
	他国の人	34	4	0	0	0	33	0	30	2.4	6.4
アメリカ	住んでいる地域	41	42	13	4	4	31	2	280	23.8	43.1
	住んでいる国	42	35	11	3	1	79	0	300	13.4	43.4
	沖縄県内の人	44	30	9	0	4	77	0	100	8.8	15.0
	他国の人	64	21	1	1	0	76	0	100	5.6	16.8
ブラジル	住んでいる地域	1	10	6	4	9	31	0	300	64.5	81.8
	住んでいる国	4	8	9	1	4	26	0	300	30.9	60.4
	沖縄県内の人	9	7	5	3	0	24	0	50	7.1	17.1
	他国の人	16	5	1	2	1	25	0	100	3.9	23.4

注 1) SD は標準偏差

注 2) 交流人数 301 人以上という回答を外れ値として除外した。

沖縄系のネットワークは、ハワイ内でまわっている／自足せざるを得ない状況があることがうかがえる。ハワイでは、アメリカ合衆国他州の沖縄県系人との交流よりも、沖縄県民との交流の方が量的に大きいことも特徴的である。そして、他国の沖縄県系人との交流の量は、海外参加者全体やアメリカ、ブラジルと比べてかなり小さい。このように、〈島嶼コミュニティ型〉という仮説で想定されていた特徴が、2016年調査においても見いだせた。

これに対して、アメリカは、住んでいる地域と住んでいる国との交流の量がほぼ拮抗している。そして、沖縄県民との交流と他国の沖縄県系人との交流の量がほぼ等しい。住んでいる州だけにネットワークを限定する必要のないアメリカにおいては、ハワイよりも住んでいる地域の交流の量はやや小さく、住んでいる国との交流の量はかなり大きくなっている。こちらにも、〈大陸ネットワーク型〉という仮説で想定されていた特徴が見いだせた。

ブラジルは、参加者数が第6回大会で減少しており、回答者も少なかったことから、調査データにかなりバイアスがかかっている恐れがある。回答者における県人会活動への参加の度合いは、ブラジルが際立って高い（図13）。ブラジルから大会にやってきた人は、とくに回答者数が少なかった2016年調査においては、熱心に県人会活動をやっている県人会幹部などである可能性が高く、ハワイやアメリカのように、日ごろは県会にあまり関わっていない人も含めた、それなりに多様な参加者がいるという見込みは、ブ

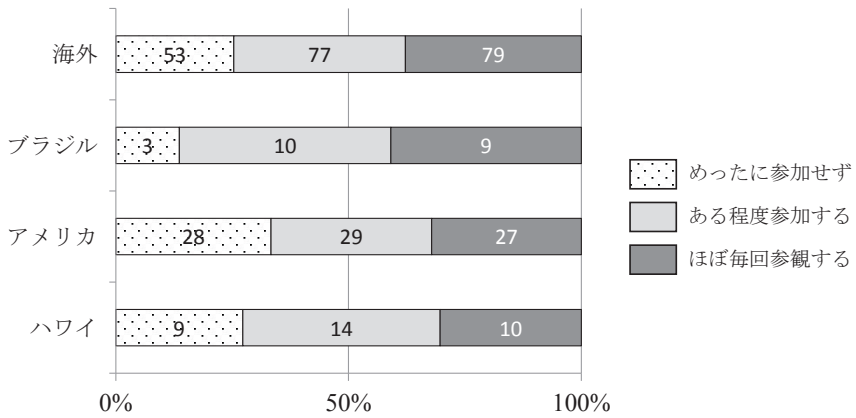


図 13 居住地別 県人会参加の度合い (2016)

表 12 居住地別 大会による交流成果 (大会で得られた新規交流予定の人数) (2016)

単位:人

居住地	新規交流予定先	0	1~10	11~30	31~50	50~	度数	最小	最大	平均	SD
海外	住んでいる地域	37	80	56	17	14	209	0	150	15.3	31.3
	住んでいる国	52	73	30	13	11	186	0	250	15.9	31.3
	沖縄県内の人	58	85	37	5	6	199	0	150	10.5	19.1
	他国の人	69	79	26	7	5	381	0	100	4.6	12.7
県内	海外の人	309	67	8	3	0	334	0	50	1.4	5.4
ハワイ	住んでいる地域	3	11	14	2	2	36	0	100	11.9	17.1
	住んでいる国	5	18	5	1	1	33	0	150	16.2	31.0
	沖縄県内の人	9	15	7	0	0	37	0	100	10.8	17.6
	他国の人	15	15	2	0	1	61	0	60	3.7	10.2
アメリカ	住んでいる地域	16	32	28	6	7	63	0	100	17.6	23.8
	住んでいる国	22	26	12	8	6	57	0	200	16.7	32.8
	沖縄県内の人	25	29	17	2	1	65	0	100	11.3	13.4
	他国の人	27	30	10	3	2	131	0	100	5.0	14.8
ブラジル	住んでいる地域	3	12	8	3	1	27	0	100	18.2	21.0
	住んでいる国	5	8	6	2	1	22	0	80	16.7	19.1
	沖縄県内の人	4	6	5	3	3	21	0	100	26.5	34.1
	他国の人	8	3	8	2	1	41	0	100	9.2	19.2

注 1) SD は標準偏差

注 2) 交流人数 301 人以上という回答を外れ値として除外した。

ラジルには当てはまらない。したがって、ブラジルにおける交流の量の、アメリカをはるかに上回る大きさは、かなり割り引いてとらえる必要がある。どこへ向かっているかという交流のベクトルに注目すると、住んでいる地域で住んでいる国よりも交流の量が大きい、ハワイほどの開きはない。また、ハワイとは逆に、沖縄県民との交流よりも、他国の沖縄県系人との交流の方が大きかった。限定的なデータからの類推ではあるが、<大陸ネッ

トワーク型>の特徴がいくつか見いだせた。

表12は、大会で得られたネットワークの成果とも言うべきもので、大会を契機として、今後、新たに交流していく予定の人数を、主要な居住地別にまとめたものである。標準偏差で見ると、海外全体では、住んでいる地域と住んでいる国が同一で、県民、ついで他国の県系人となっており、大会以前の交流実績（表11）とほぼ重なる傾向が見いだせた。一方でハワイでは、住んでいる地域での交流は、大会前から充実していたために伸びが小さく、住んでいる国の方で交流の量が伸びている。県民との交流は、大会前実績の方が新規の交流予定より小さいが、他国との交流については、大会前実績よりも交流予定の方が大きい。ハワイにおいても、一概にハワイの外との交流に消極的とは言いきれない結果となった。それでも他国との交流予定は、アメリカ、ブラジルと比べれば小さい。ハワイの<島嶼コミュニティ型>類型については、ハワイ諸島の外にいる沖縄系の人びととの交流意欲は存在し、大会という機会を活かしてネットワークを広げる人びともいるのだが、島嶼性という地理的な要件によって大陸ほどの広がりを持ちきれず、ある程度、ハワイ内での自足的ネットワークを持たざるをえない状況としてとらえなおすことができた。

アメリカは、住んでいる地域よりも住んでいる国でやや伸びが大きく、県民と他国については、大会前の交流実績と大会で得られた新規の交流予定がほぼ等しかった。ブラジルでは、住んでいる地域と住んでいる国がほぼ等しかった。新たに得られた県民、他国との交流予定の数値はかなり大きい、やはりデータのバイアスに留意する必要があるだろう。

IV. 結論——「世界のウチナンチュ」の日常化に向けて

1. 主観、愛着と祖先のルーツの重要性

仮説①沖縄アイデンティティの構築性については、海外参加者の全体的な傾向において、自身にあてはまる項目を「ウチナンチュ」の構成要素として選び、該当しない項目は選ばないことが確かめられた。ただ、移民1世において、沖縄出生や親の出自という、本人にあてはまる項目の順位が下がり、代わって祖先のルーツというシンボリック・アイデンティティが順位を上げた。

今回の調査で見出された最も重要な沖縄アイデンティティの特徴は、第一に、主観と愛着の優位性である。生まれ育ちなどの<生得的要素>は全体として後退し、<獲得的要素>を重視する意識が広がった。第二に、<生得的要素>の下降の中で、祖先のルーツというシンボリック・アイデンティティだけは重要性を保ち、あるいは増してきていることが指摘できる。主観と愛着という、個人が自在に抱きうる項目が優位化するのに伴って、その主観性を補てんするかのよう、血統という紐帯を象徴するシンボリック・アイデンティティの意義が浮上してきていることは興味深い。

祖先のルーツは、血統とともに、移民の集合的記憶を象徴する。祖先のルーツに根ざした沖縄アイデンティティをもつことは、沖縄から移民し、生活基盤を切り拓いてきた先の世代の人びとの営みを、感謝をもって記憶に刻むことであるように思われる¹⁴⁾。地域的にはアメリカとブラジルにおいて、祖先のルーツを重視する意識が増してきている。ハワイはもともと祖先のルーツ重視が著しかったため、それ以上の伸びはない。アメリカとブラジルがハワイ並みになりつつある。

2. <島嶼コミュニティ型>と<大陸ネットワーク型>

2016年調査では、2006年調査で索出された<島嶼コミュニティ型>と<大陸ネットワーク型>という仮説的類型の特徴が、ハワイ、アメリカ、ブラジルからの参加者の回答において、おおむね見いだされた。

ただし、ハワイにおいては、相対的な交流意欲の低さ、ハワイ内の自足的ネットワークという仮説が修正された。ハワイは、交流意欲そのものは低くないが、地理的な制約があり、ハワイ内でネットワークを自足せざるを得ない状況として<島嶼コミュニティ型>の解釈は更新された。ハワイからの参加者には、大会という機会をとらえてネットワークを広げている人も少なくない。しかし、そうであっても、ハワイにおける他州や海外の沖縄県系人との間のネットワークの量は、大陸エリアよりもかなり小さい。一方で、県民との交流については、アメリカよりも量が多いことが見いだされた。ハワイは、これまでの「世界のウチナーンチュ」のネットワーク化をけん引してきた一方で、海外の県系人どうしの交流よりもむしろ沖縄に視線が向いているという、2006年調査で導かれた仮説が確かめられた。

<大陸ネットワーク型>は、アメリカとブラジルである。

ブラジルでは、日本語話者である戦後移民1世が、代替りの時期を迎えつつある。ローカル言語化が進むと、ブラジルは、南米における沖縄県系人の居住地の中で、唯一のポルトガル語圏となっていく。その言語的少数性が、南米におけるブラジルの立ち位置に影響を及ぼしていくことも考えられる。一方で、スペイン語圏であるペルーやアルゼンチンは、第6回大会において参加者数を伸ばしている。これらの南米諸国が、今後、どのように沖縄アイデンティティを継承し、相互のネットワークを結んでいくのかが注目される。

アメリカにおいては、現代的な人の流入が続いていることが、ネットワーク形成における大きな優位性であると考えられる。ただし、ハワイの島嶼性・集住性と同じく、この社会的要件はきわめてユニークで、他の沖縄県系人の居住地域にはあまり見出せない。

海外の沖縄県系人は、アイデンティティにおいては主観と愛着を中心に<獲得的要素>が優位化し、祖先のルーツ以外の<生得的要素>が後退する傾向をある程度、共有している。そして、移民世代ごとの差異は小さくなる傾向にあり、ある種の均質化が見いだせる。

一方で、ネットワーク化については、ハワイ、アメリカ、ブラジルのいずれかの地域が、沖縄系社会として汎用性のあるモデルとなり、「世界のウチナーンチュ」全体をけん引していくことは考えにくい。それぞれの地域が、ユニークな成り立ちに根ざしてネットワークを紡いできており、その営為は今後も続いていくと思われる。

2016年調査では、沖縄アイデンティティをめぐる地域間、移民世代間での一定の均質化と、ネットワーク化をめぐる多様性がともに見いだせた。海外の沖縄県系人のダイナミズムは、均質化と多様性の要素を併せ持っていることがわかった。

3. 沖縄県民と「世界のウチナーンチュ」

2016年10月23日、勝連城址で開催された第5回世界若者ウチナーンチュ大会のイベントで、ステージに立ったアーティスト、Awichは、聴衆のひとりひとりを指さしながらこう言った。

「あんたたち、わかってる？これは世界のウチナーンチュ若者大会なんだよ。ここにいるみんな全員、世界のウチナーンチュなんだよ。あんたも、あんたも、世界のウチナーンチュなんだよ。」

この語りかけは、「海外からやってくる“世界のウチナーンチュ”を沖縄県民が歓迎する」という、大会において自明とされてきた「海外／沖縄」の二項図式を突き崩す要素をはらんでいた。今、改めて問い直してみても、容易くは答えが見出しがたい。沖縄県民を含めて、「みんな全員、“世界のウチナーンチュ”」なのだろうか？

2011・2016年調査の結果を比べると、沖縄アイデンティティが大きく変化したのは、海外参加者よりもむしろ県内参加者であった。県内参加者は、「沖縄生まれ」を、ウチナーンチュの要件として最重視しなくなった。県民が「世界のウチナーンチュ」になったのかどうかは別として、大会に参加している県民の沖縄アイデンティティが、海外の沖縄系の人びとを包み込む方向へと変化してきていることは指摘できる。沖縄生まれでない人や、今、沖縄に住んでいない人を「ウチナーンチュ」から排除するような認識は後退し、より共感しやすいもの、沖縄が好きであることや自分自身がウチナーンチュだと感じていることへと、沖縄アイデンティティの主要な指標が変わってきている。

一方で、主観と愛着を重視するアイデンティティも、それなりのメンバーシップを伴う。2018年1月20日、海外の視点から沖縄を語り、沖縄の基地問題などを幅広い視点で考え、問題解決につなげようとするネットワーク「ちむぐくるアクション」が、沖縄県浦添市で催しを開いた。主要なメンバーは、沖縄と海外を行き来する沖縄系南米人の若者などである。呼び掛け人が、このネットワークの参加者を、「ウチナーンチュに限らず『沖縄の痛みに共感できる“ちむぐくる”のある人』¹⁵⁾と表現していることは示唆的である。ここでいう「ウチナーンチュに限らず」とは、血統を指していると思われる。それよりも「痛みの共感」というエモーショナルな紐帯が、ネットワークのメンバーシップとされている。

アイデンティティの＜生得的要素＞は、それを持たない者は排除するのだが、その客観的指標を持ってさえいれば、意識や行為はあまり問わないという、ある種の広やかさも有していた。これに対し、主観・愛着・貢献意欲という＜獲得的要素＞においては、意識や行為が重要となる。そのメンバーシップは、共感や集団的な高揚に加わる人、何らかの活動に意識的に関与する人によって共有されていく。

主観と愛着の沖縄アイデンティティにおいては、とくにエモーショナルな共感性が重要となってくる。言い方を変えれば、大規模な祝祭空間を感動的に演出する「世界のウチナーンチュ大会」というイベントそのものが、共感を高める装置としての成り立ちをしているともいえる。

大会は、共感の起爆剤としては比類のないものであると言えるだろう。一方で、発展可能性としては、イベントの開催や共感の高揚そのものを自己目的化するよりは、むしろ「世界のウチナーンチュ」という関係性を日常化していくことが重要であるように思われる。現実の課題解決に「外からの視点」を取り込む「ちむぐくるアクション」や、図書館のレファレンスサービスをハワイのオキナワンフェスティバルに出前し、ルーツ探しのサポートで好評を博した沖縄県立図書館のアウトソーシング¹⁶⁾などが、その秀でた事例として挙げられる。主観と愛着の沖縄アイデンティティは、このような「世界のウチナーンチュ」

という関係性の日常化、すなわち交流のために交流するのではなく、国境を越えて人と人との間、日常に根ざした意味のあるやりとりを積み重ねることの中に、その豊かな共感性を發揮していくことと思われる。

付記 大会調査に回答くださった参加者の皆さんに深謝します。

注

- 1) 第6回世界のウチナーンチュ大会実行委員会(2017) p.159 参照。
- 2) 第4回大会調査は、文部省科学研究費補助金基盤研究(B)「沖縄社会の越境的ネットワーク化とダイナミズムに関する研究」(代表・金城宏幸)の一環として行われた。共同研究者は、鉾塚健太郎と筆者である。その成果は、琉球大学移民研究センター『移民研究』第4号に記載され、2008年にロサンゼルス、ハワイ、ブラジルで成果が報告された。第5回大会調査は、琉球大学の「人の移動と21世紀のグローバル社会」事業の移民研究班を中心に、金城宏幸、前村奈央佳、崎濱佳代、佐久本義生と筆者が調査を行った。その成果は、『移民研究』第8号に記載された。第6回大会調査は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)(課題番号:15K04031 代表・加藤潤三)と同若手研究(B)(課題番号:16K17296 代表・前村奈央佳)の一環として行われた。共同研究者は金城宏幸、酒井 清、山里絹子、グスターボ メイレレス、石原綾華と筆者である。いずれの大会調査も、世界のウチナーンチュ大会実行委員会事務局にご協力を頂き、同事務局と共同で実施された。
- 3) 2016年調査では、「自分をウチナーンチュだと思うか」という問いに「非常にそう思う」「ややそう思う」と肯定的に回答した海外参加者の比率は76.6%であった(第6回世界のウチナーンチュ大会実行委員会, 2017, p.148)。さらに、沖縄アイデンティティを数値化した加藤・前村によると、移民1世3.84, 2世3.71, 3世3.55, 4世以降3.42となり、世代が推移しても沖縄アイデンティティは高い水準を保っていることが確かめられた(前掲書, p.149)。2011年調査では、「自分をウチナーンチュだと思う」という問いに肯定的に回答した沖縄系移民は94%で、世代ごとの違いはほとんどなかった(第5回世界のウチナーンチュ大会実行委員会, 2012, 134-135.)。
- 4) 野入(2012) 参照。
- 5) 野入(2008) 参照。
- 6) 野入(2009) 参照。
- 7) 野入(2009) p.34 参照。
- 8) 6回世界のウチナーンチュ大会実行委員会(2017) p.159, 第4回世界のウチナーンチュ大会実行委員会(2007) p.172-173を参照し作図した。
- 9) この設問および選択肢の構成は、2011年調査では琉球大学の社会学専攻が2006年に実施した県民意識調査で用いたものをそのまま用い、2016年調査では重みづけがわかるように更新したものである。安藤由美・鈴木規之(2012) 参照。
- 10) 土田(2007) 参照。

- 11) 野入（2009）参照。
- 12) 前掲書，p.32-33.
- 13) 前掲書，p.33-34.
- 14) アルゼンチン移民3世のグース外間が作詞作曲した「時空の花」という曲の動画は，祖父が孫に移民の経験を物語るシーンから始まる。アルゼンチンで生まれ育った孫が，祖父の経験と思いを共有することによって沖縄との強い絆を見出していく過程が歌われており，祖先のルーツにおける移民の記憶の重要性が示唆されている。
- 15) 琉球新報 2018年2月1日付「世界のウチナーンチュ，基地問題解決へ始動 若者ら呼び掛け ちむぐくるアクション」参照。
- 16) 沖縄タイムス 2017年9月4日付「ルーツ探し手伝います！沖縄県立図書館がハワイで窓口，76件受け付け」，琉球新報 2017年9月4日付「親戚探し，手伝います 沖縄県立図書館が初出展」参照。

文献

- 安藤由美・鈴木規之編著 2012 沖縄の社会構造と意識——沖縄総合社会調査による分析，九州大学出版会。
- 野入直美 2008 「世界のウチナーンチュ大会」と沖縄県系人ネットワーク（2）——参加者の〈声〉に見るアイデンティティと紐帯の今後，移民研究，4，97-115.
- 野入直美 2009 「世界のウチナーンチュ大会」と沖縄県系人ネットワーク（4）——中南米からの参加者の特徴を中心に，移民研究，5，27-40.
- 野入直美 2012 構築される沖縄アイデンティティ：第5回世界のウチナーンチュ大会参加者アンケートを中心に，移民研究，8，1-22.
- 第4回世界のウチナーンチュ大会実行委員会 2007 第4回世界のウチナーンチュ大会報告書.
- 第6回世界のウチナーンチュ大会実行委員会 2017 第6回世界のウチナーンチュ大会報告書.
- 土田映子 2007 エスニシティ概観：コンセプトの形成と理論枠組 国際広報メディア研究科・言語文化研究報告叢書 グローバリゼーションと多文化共生，68, 1-20
(のいり なおみ・琉球大学法文学部・准教授・社会学)

Subjectivity and Attachment in Okinawa Identity: The Survey Results of the Sixth Worldwide Uchinanchu Festival in 2016

NOIRI Naomi

Faculty of Law and Letters, University of the Ryukyus
(Sociology)

Key words : "Worldwide Uchinanchu", Oversea Okinawans, Okinawa identity

We discuss on the overseas Okinawan's ethnic identity, examining the survey data of the fourth, the fifth and the sixth World-wide Uchinanchu Festival in 2006, 2011 and 2016 in this paper. Innate factors of Okinawan identity, especially "Born and grew up in Okinawa" was decreased, while winning factors, especially "Attachment to Okinawa" and "Subjectivity being an Okinawan person" was increased. Only one increased innate factor was "Roots of ancestor".